

トップガンジャーナル



理数クラブ

Journal of TopGun

第6号

活動レポート

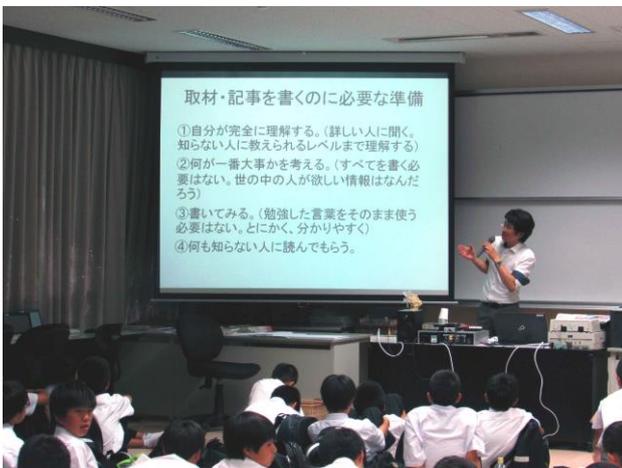
「科学記事の書き方」

7月23日(水)、トップガン理数クラブが附属浜松中学校で行われました。受講者は、受講者



は、中学生 名,小学生 名の計 名でした。

講師の先生は、左の写真の「静岡新聞社浜松総局」
高林 和徳 様 です。先生から、科学記事の書き方を教えていただきました。



< 講座受講の様子 >

教えていただいたこと

<新聞のルール>

大切な事から書いていく（逆三角形）

5W1H（いつ When、だれが Who、どこで Where、何を What、なぜ Why、どうした How）

<写真や図の大切さ>

文字だけの時より、伝わりやすい

<東海地震>

東海地震は、他の地震と比べると、陸で起こるため、予知しやすい

大きな地震は、これまでは100年に1度くらいのペースできていたが、東海地震は

160年くらい来ていなく、いつ来るか分からない。そのせいで、他の地震と重なってしまうかもしれない

<記事を書くときのポイント（考える事）>

取材対象の特徴、特別なことは？

これまでの経緯、課題は？

今後の展望、ねらいは？いつ、だれが、どこで、何を、なぜ、どうしたのか。

当事者の思いは？

5W1Hを使い、分かりやすく伝える（いつ When、だれが Who、どこで Where、何を What、なぜ Why、どうした How）

↳ どうしたら分かりやすく伝わるか？

写真や図を使うと短くて誰でもわかりやすい文章が書ける。

インタビュー

たかばやし かずのり
高林 和徳様

Q. 私達（小・中学生）が記事を書く時、一番大切にしてほしい事はなんですか？

A. やっぱり、せっかく書いたとしても、その記事を読んでもらわなければ意味がない。だから、その記事を読んでもくれる人を思い浮かべて、その人ができるだけ関心を持って、少しでも読んでくれるようにする事が一番大切ですね。

Q. 記事を書いていて、嬉しかったり、楽しかったりする事はなんですか？

A. 私達は、世の中であった事で、読者の方が一番知りたい事、また、関心を持ってもらえるような記事を書く事を目標にしています。そのために、取材対象のいわゆる痛い所をつく、例えば“この工事は、途中で止まってしまっているが、どう

なっているのだろうか。”このようなことを書くことで、読者の皆さんに興味を持ってもらえるような記事を書くことができると私は考えています。だから、実際に読んでもらっているという実感はあまりありませんが、その記事を読んでもらって反響をもらって、世の中が変わったりしたときが一番うれしいです。

小・中学生へのインタビュー

Q. 今日の講座を受けて、今後はどう生かそうと思いましたか？

A. 科学記事を書くには、大切なことがたくさんあると思いました。今後は、自由研究や、レポート、授業に生かそうと思いました。

編集部子ども記者より

私たちは、初めてイベント取材し、ホームページにまとめるという仕事をしました。この記事を書くときは、みんなで集まって相談したり、休みの日に学校に行き行って書いたり、話し合ったりして、大変でした。しかし、記事を書いているときは、本物の新聞記者になったような気分で書いて、とても楽しかったです。また、今回は、題材が記事の書き方ということもあり、高林様がお話してくださったことをもとに、記事を書くことができました。「短い文章で分かりやすく」ということを考えましたが、どうしてもながくなってしまい、文章を短く分かりやすくまとめるのは、難しいと思いました。とても良い体験ができて、良かったです。またやらせていただける機会があれば、やらせていただけると嬉しいです。

国立大学法人静岡大学教育学部附属浜松小学校

6年 辻 心野、鈴木 葵、鈴木 結子